

東南アジア史学会会報 No. 17

昭和 47 年 8 月 14 日

米国の大東亜共栄圏思想研究

市川 健二郎

近年日本軍国主義思想研究が米国で進み、 Imperial Japan and Asia: A Reassessment, compiled by G.K. Goodman (New York: The East Asian Institute, Columbia University, 1967); The Emergence of Imperial Japan: Self-Defence or Calculated Aggression?, edited by M.J. Mayo (Lexington, Mass.: D.C. Heath & Co., 1970)

など戦時思想を再評価する動きがみえる。4年前にマラヤ大学で開いた国際アジア史学会でも部会「第二次大戦下の東南アジア」(司会 H. J. Benda)で6人の研究発表を中心に日本軍政と民族独立軍の問題が、また別の部会「東南アジアのナショナリズム」(司会 Wang Gungwu)で J. B. Crowley, G. K. Goodman, Y. Akashi らを中心に反共思想や反日思想と東亜新秩序との思想と行動の相互関係が論ぜられたことがある。

そのころから大東亜共栄圏思想とその域内各国への投影が再評価されるようになった。J. C. Lebra の著書(1968年11月)はインド民族独立運動と大東亜共栄圏思想との関係に注目し、Y. Akashi の論文(1970年)は日本のマラヤ華僑政策にはムチとアメの二面性があった点を強調している。去年9月にシカゴで開催した全米政治学会大会の部会「東南アジアの日本軍政」(司会 H. J. Benda)ではビルマ、マラヤ、インドシナにおける日本精神の教育成果と当時の生徒の戦後社会における生活との相関関係が注目され、昭南日本学園などの学校で学んだ皇道精神、八紘一宇、大和魂がどのような行動型を生みだしたかが問題となつた。現在日本でこの問題を調査している J. C. Lebra 教授もこれらのグループ研究の一員として東インドやインドシナに設置した日本の訓練所の実情と当時生徒だった現地青年達の戦後の生活を追跡調査している。

Archipel の創刊

永積 昭

「植民地の風物の研究」という性格を完全には拭い切れなかった第2次世界大戦以前の東南ア

東南アジア史学会会報 No. 17

昭和 47 年 8 月 14 日

米国の大東亜共栄圏思想研究

市川 健二郎

近年日本軍国主義思想研究が米国で進み、 Imperial Japan and Asia: A Reassessment, compiled by G.K. Goodman (New York: The East Asian Institute, Columbia University, 1967); The Emergence of Imperial Japan: Self-Defence or Calculated Aggression?, edited by M.J. Mayo (Lexington, Mass.: D.C. Heath & Co., 1970)

など戦時思想を再評価する動きがみえる。4年前にマラヤ大学で開いた国際アジア史学会でも部会「第二次大戦下の東南アジア」(司会 H. J. Benda)で6人の研究発表を中心に日本軍政と民族独立軍の問題が、また別の部会「東南アジアのナショナリズム」(司会 Wang Gungwu)で J. B. Crowley, G. K. Goodman, Y. Akashi らを中心に反共思想や反日思想と東亜新秩序との思想と行動の相互関係が論ぜられたことがある。

そのころから大東亜共栄圏思想とその域内各国への投影が再評価されるようになった。J. C. Lebra の著書(1968年11月)はインド民族独立運動と大東亜共栄圏思想との関係に注目し、Y. Akashi の論文(1970年)は日本のマラヤ華僑政策にはムチとアメの二面性があった点を強調している。去年9月にシカゴで開催した全米政治学会大会の部会「東南アジアの日本軍政」(司会 H. J. Benda)ではビルマ、マラヤ、インドシナにおける日本精神の教育成果と当時の生徒の戦後社会における生活との相関関係が注目され、昭南日本学園などの学校で学んだ皇道精神、八紘一宇、大和魂がどのような行動型を生みだしたかが問題となつた。現在日本でこの問題を調査している J. C. Lebra 教授もこれらのグループ研究の一員として東インドやインドシナに設置した日本の訓練所の実情と当時生徒だった現地青年達の戦後の生活を追跡調査している。

Archipel の創刊

永積 昭

「植民地の風物の研究」という性格を完全には拭い切れなかった第2次世界大戦以前の東南ア

シア関係学術雑誌に比して、たしかに一時代を画したと言えるものは、1960年から約10年にわたってシンガポールで編集されていた *Journal of Southeast Asian History* であろう。もっとも人によってはこれすら新植民地主義の産物ときめつけるかも知れないが、ともかく欧米人だけでなく、東南アジアその他非西洋出身の学者の研究成果をも積極的に紹介していたが、1970年以降は *Journal of Southeast Asian Studies* と名を変えてこんでちに及んでいる。*history* の語が脱落したことからもわかるように、掲載論文の内容はめだって歴史から現状分析へと比重を移して来たことが惜しまれるが、「東南アジア史」という特殊な分野の雑誌が年2回の頻度で出版され続けることの困難を示していると言えないこともない。我々自身の経験からも言えることだが、一時的に多数の論文が集ることと、学術雑誌そのものを定期的に息長く続かせて行くこととのかね合いは誠にむづかしく、そうかと言って集った労作を出し惜しみつつ、少しづつ載せていけばいいわけでは、むろんない。英語の学術雑誌に限って言えば、十年ほど前まで東南アジアに頁を割くことの少かった *Journal of Asian Studies* などに、どんどん東南アジア史関係の論文が載るようになり、またコーネル、イエール、オハイオその他世界中の大学で、モノグラフ類の発行が多くなったことも、かえって地域専門雑誌の存続をむづかしくしていると言えよう。東南アジアのうちインドネシアについてはコーネル大学で年2回発行している贋写版刷りの *Indonesia* が数少い存在のひとつである。現在までに12冊を数え、内容も非常にすぐれたものであるが、すでに御承知の方も多いことと思い、ここでは触れない。

さて、そういう一般情勢の中で1971年から刊行され始め、現在第2巻までが世に出ている *Archipel* は、東南アジア島嶼部を対象とするものにもかかわらず、英語でもオランダ語でもなく、フランス語で書かれ、インドネシアで刊行される珍しい雑誌である。雑誌の副題を *Etudes interdisciplinaires sur le monde insulindien* としていることからも明らかのように、必ずしもインドネシアだけに限らず、フィリピンや遠くマダガスカルまでも対象としている。パリの *Ecole Pratique des Hautes Etudes* 内にある「東南アジア・インドネシア世界に関する文献・研究センター」(Centre de Documentation et de Recherches sur l'Asie du Sud-Est et le Monde Indonésien 略称CEDRASEMI)の援助のもとに「東南アジア島嶼部世界の研究及び知識普及協会」(Société pour l'Etude et la Connaissance du Monde insulindien 略称SECMI)が編集したものである。編集者はPierre

Labrousse, Denys Lombard, Christian Pelras の3人で、このうちインドネシアに関する文献目録作成やアチエー全盛期のすぐれた研究業績を発表したロンバール以外の2人については、私は寡聞にして経歴を知らない。

編集方針はフランス風に誠に垢ぬけていて、それぞれの巻をいくつかの部分にわけ、Chronique - Actualité, Notes - Documents, Etudes - Recherches, Bibliographies - Comptes-rendus などと名づけている。さらに第2巻ではDossier - « Ajip Rosidi » (アイブ・ロシディー一件書類)というややふざけた題名で、1938年生れのインドネシアの中堅作家兼ジャーナリストであるロシディーの作品紹介や解説の特集を行なったりしており、今後もこの種の特集記事に期待が持たれる。以下、既刊分の内容(ただし書評を除く)を全部列挙してみる。なお便宜上通し番号を附する。

Tome I:

Chroniques-Actualité

- (1) J. Genest, 1970 en Indonésie.
- (2) G. Chesnel, Statistiques économiques indonésiennes 1970.
- (3) V. Monteil, Relationship between Religions in Indonesia.
- (4) B. de Beer, L'Institut de Technologie MARA de Kuala Lumpur.
- (5) Liste des communications concernant le Monde insulindien présentées au 28e Congrès International des Orientalistes (Canberra, janvier 1971).
- (6) Liste des communications présentées au Congrès de Culture malaise (Puntjak, avril 1971).

Notes-Documents

- (7) J. L. Veslot, Universités et revues de sciences humaines aux Philippines.
- (8) B. Milcent, Ki Hadjar Dewantara et l'association des civilisations.
- (9) H. Chambert-Loir, Angkatan 66, une nouvelle "vague"?
- (10) C. Pelras, Louis Berthe, 1927-1968.

- (11) Pages d'Exotisme I: L'Odeur d'Ilang-ilang de René Ghil.

Etudes-Recherches

- (12) G. Condominas, Gotong-rojong di Tanah Malagasi (trad. F. Soemargono).
- (13) B. Koechlin, Les implications de l'emploi privilégié de l'organe de la vue chez les Sakalava-Vezo de Madagascar.
- (14) D. Lombard, Voyageurs français dans l'Archipel insulindien, XVII^e, XVIII^e, XIX^e siècles.
- (15) C. Pelras, Hiérarchie et pouvoir traditionnels en pay Wadjo' (Celebes).

Tome II:

Chroniques-Actualité

- (16) J. Genest, Chronique d'Indonésie (Janvier-Juillet 1971).
- (17) Résultats des élections générales indonésiennes (3 Juillet 1971) présentés par. G. Chesnel.
- (18) L. Metzger. L'Institut malaysien de langue et de littérature.
- (19) M. Bonneff, Gama, portrait d'une université.

Notes-Documents

- (20) C. Lombard-Salmon, Le Sjair de l'"Association chinoise de Batavia" (1905).
- (21) J. L. Veslot, Note sur le Bugtong des Philippines.
- (22) H. Ratrimoharinosy, l'Ecole des femmes à Antananarive vers 1885.
- (23) Pages d'exotisme II: la société javanaise selon J. Chailley-Bert (1900).

Dossier "Ajip Rosidi"

- (24) Ajip Rosidi dalam potret diri, pertaanjaan² disusun oleh Wing Kardjo.
- (25) Entretien avec Ajip, propos recueillis par P. Labrousse.
- (26) Ajip Rosidi, Perdjalan di Malaysia (poèmes originaux).
- (27) H. Chamber-Loir, Lantaran Ajip Rosidi.
- (28) Ajip Rosidi, Le Bouc (trad. de H. Chambert-Loir).
- (29) Ajip Rosidi, Perdjalan Penganten (trad. et prés. de H. Chambert-Loir).
- (30) P. Labrousse, Retour à Djatiwangi.

Etudes-Recherches

- (31) J. Dournes, Orphelin transformé, jalons mythologiques (à propos d'un mythe Jörail).
- (32) C. Pelras, Hiérarchie et pouvoir traditionnels en pays Wadjo' (Célèbes) (suite et fin).
- (33) D. Lombard, Un expert saxon dans les mines d'or de Sumatra au XVII^e siècle.

御覧の通り、フランス語で書かれたものが大部分であるが、インドネシア語のものもかなりあり、稀には英語もある。まず「年代記 — 現状」と題する一団には毎回その直前のインドネシアに起った重要事件の詳しい年表が載せられ、その他にも(2)インドネシア経済統計、(4)クアラルンプールの工業研究所(Majlis Amanah Ra'ayat)と(19)ジョクジャカルタのガジャ・マダ大学などがある。

「註訳 — 記録」と名づけられた一群も非常に面白い。(7)フィリピンでの大学や研究機関の一覧があるかと思うと、(21)タガログ語の押韻の対句から成る諺bugtongについての短い論文があったりする。なかでも私が興味を覚えたのは、(20)1900年に設立された中華会館(l'Association chinoiseと訳されている)で1905年の祝賀式典の時に作られた詩の全文をインドネシア語原文とフランス訳を対照させて掲載している。天帝(原文ではAllahとなっている)の意志を強調する点、儒教道徳を讃える点は当然としても、オランダ人の優越感を今に粉碎して見せようというような部分もあり、恐らく植民地政府に対しては歌詞を公表しな

かったにちがいない。4行詩で実に104節に及ぶこの長詩は、当時の中華会館指導者の意識構造を知る上に絶好の史料である。なお前に附せられた解説も、周到な文献調査に基づいたもので、かなり新しい事実に含まれている。また(8)インドネシアにおける民族主義的教育施設として名高いTaman Siswa学校の創立者として知られるKi Hadjar Dewantoroのあまり世に知られていない短文4編の紹介なども有意義である。

さらに研究論文の欄もこれに劣らず多彩で、たとえば(14)17-19世紀のインドネシア地域におけるフランス人の航海者についての、やや好事家のロンバールの論文があるかと思うと、(12)マダガスカル(マラガシ共和国)での相互扶助の慣行をインドネシアの有名なゴトン・ロヨンと比較するコンドミナスの研究などもある。ロンバールはもうひとつ(33)17世紀のアチエー国王が金塊に異常な執着を持ち、20人のイギリス人坑夫を雇ってミナンカバウ地域の金鉱を採掘させる話を紹介している。この他(15), (32)スラウェシ島南西部のワジョ族に関するペルラスの論文は、この社会の階級や権力構造についての精密な研究である。

最後に各巻の巻末にはいずれもインドネシア語と英語でかなり詳しい要約がついていて、内容を知る上に甚だ便利である。とにかく造本はかなり貧弱ながら、誠に親切に行き届いた雑誌と言うことができる。

この雑誌の購読料は毎年(各2巻)につき米貨9ドルで、送金はSECMY宛ての小切手とし、宛先はBanque de l'Indochine, P.O.Box 246, Singaporeとなっている。さらにこれと別に、予約申込書(書式は雑誌に添附)をSECMY, P.O.Box 215, Bandung, Indonesiaに送ること、と記されている。

国内の研究動向

[広島地区]

広島大学内東南アジア研究会については、別に述べたこともあるが、本年秋に地理学部門の会員を中心として、第三次インド現地調査が派遣されることとなったことと、本年四月から文学部にインド哲学講座が新設されるに至ったのを機として、本年度の総会を広島日印協会との共催で下記のように開催した。

日 時：6月17日

所 在：見真講堂

行 事:(1) 総会

: (2) 講演「インド哲学」(P.J.Rao氏 インド大使館一等書記官)

「インドの文化地理—仏跡を中心に—」 北川健次氏(広大助教授)

「インドあれこれ」 田村治郎氏 (田村化工KK社長)

(3) 夕食会

以上のように、盛会裡に閉会した

(伊東 隆夫)

[九州地区]

さきに本会報No.9(昭和44年4月30日発行)で九州地区の研究状況を報告したが、その後も九州地区の会員数の増加は見られない(現在2名)。今回は筆者の所属する鹿児島大学の現況と筆者の近況を報告する。

鹿児島大学の現況

- 1) 南科研資料センターは「南科研資料センター報告」を第9号(昭和46年11月刊)まで刊行し、本学所蔵の学術雑誌、紀要の東南アジア関係の論文目録、及び図書目録を掲載。
- 2) 教養部史学教室は「鹿児島大学史録」を第4号まで発行し、現在第5号を編集中。9月中に刊行の予定。

筆者の近況

「教養部史学科報告」(年一回発行)に「マンナン・ヤーザワイン」の訳註を毎年発表し、本年8月刊行予定の第21号には「10部のⅡ」を発表する。 (荻原 弘明)

今年度東南アジア史学会大会(予定)

今秋の大会の次第は下記のとおり予定しており、最終的には10月下旬ごろに研究発表レジメなどとともに御案内いたします。研究発表を希望される場合には末尾に記載しましたように、規定の日までに発表要旨を委員会宛に送付下さい。

(1) 日 時 昭和47年11月17日(金)・18日(土)の両日

受付開始、午前9時30分 開会、午前9時50分

(2) 場 所 私学会館(東京都千代田区九段4-2、電話261-9921中央線市ヶ谷駅
徒歩3分)

(3) 発表と討論 第1日(研究発表)

(1) 「東南アジアの奴隸」

司会 山本 達郎(国際キリスト教大)

発表(10.00~11.30) 石沢 良昭(東洋医大)

大野 徹(大阪外大)

石井 米雄(京大)

一般討論(11.30~12.30)

(2) 「インドネシアの歴史学研究」

司会 中村 孝志(天理大)

発表(1.30~2.10) 永積 昭(東大)

討論(2.10~2.50) 間谷 栄(A.A研)

土屋 健治(東大)

一般討論(2.50~3.50)

(3) 個人研究発表(4.00~5.30)

1602年のオランダ東インド会社の特許状について 田淵 保雄(京大)

スンダ地方のメナックについて 田中 則雄(忍岡
高校)

第2日(シンポジウム)

共通課題「太平洋戦争と東南アジア」

司会 未定

発表(10.00~12.30) インドネシア 増田 与(早大)

マレーシア 板垣 与一(貿易研修センター)

華 僑 市川健二郎(水産大)

討論(1.30~4.00) 内田 直作(成城大) 高橋 保(アジア研)

河部 利夫(A.A研) 萩原 宣之(アジア研)

後藤 乾一(アジア研) 矢野 謙(京大)

高橋 彰(東洋文化研)

一般討論(4.00~5.00)

(4) 総会と懇親会

① 総会(5.30~5.50)

② 懇親会(6.00~8.30)

次号の会誌の内容

東南アジアー歴史と文化ー

No. 2, 1972, 10. (刊行予定)

内容の予定

[論文]

タイ共産主義運動の系譜：1945—1949年 市川 健二郎

1900—1918年におけるジャワ華僑の運動、I 白石 隆

真臘風土記にみえたカンボジア語について 高橋 保

詞陵国号考 仲田 浩三

フォルクスラート成立期におけるインドネシア諸政党、II 永積 昭

[研究ノート]

I.V.モジェイコ、ビルマ封建制の若干の特色 萩原 弘明

コンバウン時代のビルマの判例 大野 徹

[回想]

Harry J.Benda 教授を悼む 永積 昭

[書評・紹介]

Toem Wiphatphotcanakit, Prawattisat Isan. 吉川 利治

J.V.G. Mills, Ma-Huan: Ying-yai Sheng-lan. 小川 博

Hubert de Mestien du Bourg, "Supremière moitié due XI^e siècle au Cambodge." JA, CCLVIII, 1970. 山本 達郎

[モンスーン・学界消息]

アンコール・ワットの「発見者」 松本 信広

題未定 佐藤 茂教

アジア・アフリカ言語文化研究所 河部 利夫

アジア経済研究所 高橋 保

上智大学西北タイ歴史文化調査団 白鳥 芳郎

広島大学東南アジア研究会 伊東 隆夫

インドネシア研究会 土屋 健治

会誌第1号の内容

東南アジア—歴史と文化—

No. 1, 1971. 10.

目 次

創刊の辞	松本 信広	1
東南アジア史研究の課題	山本 達郎	5
〔論 文〕		
フォルクスラート成立初期におけるインドネシア諸政党の活動(1)		
活動(1)	永積 昭	12
南洋華僑と満州事変	明石 陽至	52
第二次大戦下のタイ社会	市川健二郎	79
清とバンコック王朝との国際関係について	野田彦四郎	101
〔研究ノート〕		
ラオス・タイに関する著書と論文 一研究と動向一	白鳥 芳郎	122
ビルマにおける串刺刑について	荻原 弘明	133
〔書評・紹介〕		
許雲樵著『南洋史』上巻,『馬来亜史』上冊	小川 博	138
Sartono Kartodirdjo, <i>The Peasants' Revolt of Banten in 1888</i>	鈴木 恒之	141
Roger Duff, <i>Stone Adzes of Southeast Asia: An Illustrated Typology</i>	松本 信広	144
Gordon H. Luce, <i>Old Burma—Early Pagan</i>	山本 達郎	146
モンスーン・学会消息		152
第28回国際東洋学者会議と東南アジア研究・山本達郎	慶應大学の東南アジア史研究・和田博徳	
ジャワの銅板刻文と弁偽法・仲田浩三	京都大学東南アジア研究センターの活動・石井米雄	
日本と東南アジアとの相互理解・市川健二郎	ラオス語の書籍・吉川利治	
Hikayat Pataniの再発見・永積 昭	インドネシア雑感・生田 波	
西ジャワを旅して・田中則雄	シルバコン大学とその考古学部長・伊東照司	
フィリピン研究とその課題・菊地 靖		
東南アジア史学会会則 東南アジア史学会入会の方法 『東南アジア』執筆要領	166—167	

東南アジア史学会会員には『東南アジア』第1号を定価(1,300円)の2割引(1,040円)で頒布いたします。会員である旨を明記の上、平凡社サービス課へお申し込み下さい。

東京都千代田区四番町4 振替東京29639
郵便番号 102 電話 03(265)0451(大代表)

「会報」バックナンバー一覧

M6. 1	東南アジア史の時代区分 一タイ史を中心として— ジャワにおける大土地所有について 東南アジア史学会の発足にあたって	河 部 利 夫 田 中 則 雄 山 本 達 郎
M6. 2	インドネシア現代史の一断面 東南アジアより帰りて	岸 幸 一 森 弘 之
M6. 3	帰国報告	永 積 昭
M6. 4	グレバガン制度について 強制栽培制度とジャワ村落 国有地宣言と農民 19世紀後半のジャワに於ける西歐的教育の普及 南詔国の強制移民政策について 一王權確立期を中心として— タイにおける奴隸制の廃止 ヴェトナムに於ける國家権力の構造 一社を中心としてみたる—	森 弘 之 田 中 則 雄 岸 幸 一 永 積 昭 藤 沢 義 美 石 井 米 雄 竹 田 龍 児
M6. 5	ジャワ語文献に現われた元(Tatar)のジャワ進討の記載 17・8世紀ヴェトナム阮氏治下の税役制度 香港学界の趨勢	仲 田 浩 三 藤 原 利一郎 松 本 信 一
M6. 6	カンボジアにおける考古学活動の現状	近 森 正
M6. 7	インドネシアにおける民族独立思想の形成 土屋健治氏の発表からひきおこされた諸テーマの探究	土 屋 健 治 Tanic e STARGARDT
M6. 8	ハジ・アグス・サリームの生涯と思想 フィリピン農村の変容過程に関する若干の問題 タイ国政治近代化の過程にみる政治的紛争の諸類型 19世紀ヴェトナムの紳豪について 祖国への華僑の政治寄金 一陳嘉庚の伝記を中心として— マラッカ王国の王統について (バラメスワラとシュリバラメスワラデワサ)	間 芹 谷 栄 高 橋 彰 矢 野 輝 桜 井 由躬雄 市 川 健二郎 中 島 慎二郎
	第四回国際アジア史学者会議	市 川 健二郎

No. 9	ドイツにおける東南アジア研究の近況 太平洋戦争下のマレーシアに於けるNipponizationについて 丁氏による安南独立の年代について ゴゴルの概念について 一地上概念の aquatificationの一例証	大林太良 明石陽至 河原正博 西村朝日太郎
No. 10	ホッヘンドルフ「バタビヤ領土の現状に関する簡単な批判」の概略 蟹の研究史 タイ国サンガの構造 ヴェトナム諸王朝の華僑政策 マラヤ北西部の中国人集落について 華僑社会の発展と変質	田渕保雄 小川博 石井米雄 藤原利一郎 前田清茂 河部利夫
No. 11	マレー人における自治心理の基調 台湾鄭氏残党の南ヴェトナム移住について ビルマ学会の趨勢について 阮瑰における志怪と伝奇 東南アジアのイスラム化における港市の役割	築島謙三 陳荆和 大野徹 川本邦衛 長岡新治郎
No. 12	タイの近代化と歴史研究 バリ島のカースト制度など 1.東南アジア国際雑誌の発刊 2.フィシェル教授の新書 3.東南アジア史の近業 4.東方学会の国際会議 5.北タイにおける先史時代遺跡の研究 6.コーネル大学東南アジア研究計画 7.陳育崧氏の来日 8.台湾に於ける先土器文化の発見 9.ベトナム古代史に関する論争	市川健二郎 河部利夫 松本信広
No. 13	タイ文化社会の諸問題 一その歴史的素因一 上智大学西北タイ山地民族調査報告 コー・ケル遷都による政治権力と宗務家系 バタヴィア市の構造 東南アジアの都市の地域構造 バンコク インドの都市 一とくにインド・ムスリムの都市形態一	森幹男 白鳥芳郎 石沢良昭 長岡新治郎 別枝篤彦 河部利夫 飯塚キヨ

	D・ファン・ホッヘンドルフの「バタビヤ領土の現状報告」	田 淵 保 雄
	ユトレヒト留学記	田 淵 保 雄
	ブノンベン-東京のあいだ	中 村 悠 子
	最近のインドシナ旅行から	高 橋 保
16.14	ナン王国について	喜 田 幹 生
	道光・咸豐両朝とチャクリ王朝との国際関係について	野 田 彦四郎
	ビルマ経済の特質とその変遷	大 野 徹
	D・ファン・ホーヘンドルフの書簡集について 一その一	田 淵 保 雄
	ジャワ文字の史的考察 一特に古ジャワ文字の起源について	仲 田 浩 三
	康泰と火浣布伝説	桑 田 六 郎
	古ジャワ語の辞典編纂について	仲 田 浩 三
16.15	安南国漂流物語について	和 田 正 彦
	新四軍、阮愛國と泰華僑：1928-1941年	市 川 健二郎
	「越南韓略」について 一清末のベトナム研究書一	和 田 博 徳
	東南アジア史における連続と断絶	永 積 昭
	「タイ仏教史における連続と変化」	石 井 米 雄
	インドネシアに於ける（民族史）確立のための試み	土 屋 健 治
16.16	粵海閥志考	野 田 彦四郎
	都市の構成 一インド・ムスリムの場合一	飯 塚 キ ョ
	東南アジアのプラーフミー系文字について	仲 田 浩 三
	D・V・ホーヘンドルフの書簡集について 一その二	田 淀 保 雄
	ツイン・ティン・タイ・ウンの新年代記について	荻 原 弘 明
	コンバウン時代の租税調査とビルマ社会	大 野 徹
	Alexander Barton Woodside : Vietnam and the Chinese model	グエン・カク・カム

編 集 後 記

委員会におきましても当学会の発展の具体的対策を積極的に検討を加えておりますが、この点についての積極的な御意見をお寄せ下さるよう希望します。なお、会報の内外の研究動向についての掲載記事も広く皆様方の寄稿をお願いしたく思います。次号は12月ごろ出版の予定でございます。

(仲 田 浩 三)

急 告

大会において、共通課題、個人研究発表の方は、9月30日限り、
発表要旨あるいはスケルトンを、御送り下さい。大会以前に冊子を
つくり、会員諸氏に配布、討論などの便に供したいと思いますので
御協力を願いいたします。